

【初等中等教育における探究学習への支援プロジェクト】 中学生のボーカロイド音楽についての探究学習に、東京大学先端科学技術研究センターの鮎川ばて先生がアドバイスをを行いました

2025.9

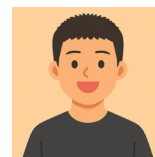
東京大学大学院教育学研究科附属学校教育高度化・効果検証センター（CASEER）では、「初等中等教育における探究学習への支援プロジェクト」において、児童生徒の発意や関心に基づく探究学習に対して専門の研究者が的確なアドバイスをすることにより、探究の成果をいっそう高度で充実したものとするをねらいに、東京大学の教員もしくは大学院生がオンラインを通じて支援・指導を行っています。

今回は中学3年生 F さんのボーカロイド音楽についての探究学習を通して出てきた疑問や悩みに、東大で現在も開講中の人気ゼミナールをもとにした『東京大学「ボーカロイド音楽論」講義』などの書籍もある、東京大学先端科学技術研究センター所属（現在は博士課程生）の、鮎川ばて先生がアドバイスしました。以下に、ダイジェストを紹介いたします。

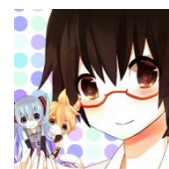
・探究のテーマ：ボーカロイド音楽作品を批評する

・相談者：F さん（中学3年生）

・探究学習の取組単位：個人



・アドバイスした人：東京大学大学院工学系研究科先端学際工学専攻博士課程・東京藝術大学非常勤講師 鮎川ばて先生



・専門：ボーカロイド、音楽評論

・コーディネーター：教育学研究科 石黒千晶准教授（CASEER センター）



理論や方法よりも、「作品」そのものに向き合い

作者のメッセージや表現の意味を浮き彫りにしていく

Series2. ボーカロイド音楽作品を批評する

F さん：今取り組んでいる卒業論文で、ぱて先生が「東京大学ボーカロイド音楽論講義」（文藝春秋、2022 年）の本でやっていたような、ボカロをテーマに合わせてピックアップして外部の資料や理論を取り入れながら 1 つの論を組み立てていくということをやりたいと思っています。その中間発表に向けては、大漠波新さんの楽曲を取り上げて、そこで表現されている「愛」とは何かについて調べているところです。ボカロカルチャーは、社会から取りこぼされた人の声だったり、思春期や青年期の葛藤だと思っているので、最終的な卒業論文はそうしたものと結びつけて書きたいと思っているのですが、まだふわっとしていて、どんな学説や文献を参考にしたらよいかなど、悩んでいます。

鮎川先生：発表の形態やサイズ感というのは、決まっているのでしょうか？

F さん：中間発表はスライドで 5 分くらいの発表をして、最終発表は卒業論文のような文字形態です。

鮎川先生：なるほど、わかりました。研究のテーマにするのは、1 曲っていう風に考えていますか？

F さん：当初の予定ではいろんな曲を扱うというか、対象は特定の 1 曲ではなかったのですが、今の予定では 1 曲になりそうです。

鮎川先生：いいと思います。例えば大漠波新さんの「あいのうた」¹には、1 曲だけでいろんなテーマが盛り込まれているから、メインで扱うのは 1 曲にフォーカスした方がやりやすくなる気はします。僕が自分の本でよくやったやり方だけど、複数の曲を取り上げていく中でも、それぞれについて 2000 字ずつ書いているわけではなくて、メインとなる曲を 1 つどーんと真ん中に置いて、それに対して他の曲ではこういう近いことを言っている、としたり。1 曲にフォーカスしたけれど、この作家にとってこのテーマは 1 曲で終わるものではなくて、いろんな



大漠波新（2023）「あいのうた」

<https://www.nicovideo.jp/watch/sm42445494>

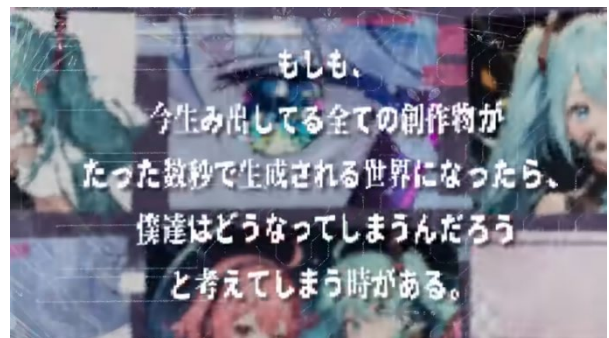
形で掘り下げ続けているテーマなんだと思います、という風にまとめたり。Fさんは、「あいのうた」については結構見てきている感じかな？ その曲と、(メモにある同じ大漠波新さんの作品である)「のだ」²だとどっちがいいかな。

Fさん：テーマを愛にしたので、それが題名に出ている「あいのうた」というのはわかりやすいと思います。「あい」という表現がいろいろ歌詞にあるし、「愛」だけではない「あい」が色々歌詞に表れているから、もし1曲に絞るなら「あいのうた」がいいと思っています。

鮎川先生：事前にいただいたメモを見せてもらったけれど、もうメモもたくさんできていますもんね。いい感じだと思います。「あい」にラブの方の「愛」と「AI」というダブルミーニングが込められているというのは、確かにこの曲の明確なコアだと思います。このことは、特殊な読みによって気づくのではなくて誰もが気づくレベルのテーマですが、それをまず素直に受け取るのはすごくいいと思います。あと、Fさんは(動画中に表示される)歌われないテキストの書き起こしをしていますね。

Fさん：はい、MVを見ながら全部自分で書き起こしました。

鮎川先生：発表のスタイルがどんな感じかわからないけれど、聞く人たちは、ボカロがどんなものかわからない状態なんですよ。ボカロはフィールドが動画サイトなので、①音楽と②映像と③言葉という3つのレイヤーで総合的に表現をするというのが基本スタイルですが、Fさんが書き起こしたような、歌詞として歌われないMV(映像)上の文字表記にも意味を持たせるというのも表現のスタイルとしてあって、この曲はまさにそれをやっている。ボカロを知らない人からしたらこれだけでも結構新しいポイントだから、そういう表現構造になっているという説明がちょっとあってもいいかもしれないですね。



大漠波新 (2023)「あいのうた」

MV 上の文字表記例

Fさん：なるほど、ありがとうございます。卒論の参考に、先生の本のそれぞれの章は、どうや

って構成されていらっしゃるのでしょうか。どういうプロセスを踏んでこういった構成にしたのかをうかがいたいです。

鮎川先生：確実に言えるのは、作品ありきで考えているということです。まず作品を中心に、批評する題材を置いて、その後にその題材にとって一番ふさわしい分析の道具や方法を後から考えるという順番ですね。道具が先行して、例えば精神分析を使いたいからこの曲を選ぶ、ではなくて、後から判断しているところがあります。ただ、これはどうしても経験値が必要で、僕はいろんな学問ジャンルに時間をかけて今に至っているから道具のストックは結構あるわけです。なので、とにかく曲を主役に、ふさわしい道具を手札のなかから出すみたいな感じにしているんですよ。Fさんは、もうすでに結構ちゃんと考えられていると思うし、方法として確立した手法を使わなくても、作品がちゃんと主役になっている批評だったら、しっかり書けるんだと思います。批評の最大の条件というのは、一次作品から離れないということです。良くない批評というのは一次作品に書いてないことを勝手に読み取って妄想することなので、とにかく作品に向き合いまくることがちゃんとできていけば問題ないと思います。

講義でも時々話すのですが、インターネットには、“縦読み”という文化があります。本当は隠されたメッセージがあるはずだと、文章の頭を縦に読んでいくのが普通の縦読みでしょう。けれども恣意的に何文字目か決めずにばらばらに読んでいくことがある。でもそれはどう考えても強引な読み方で、自分の読みたい気持ちを無理やり対象の中に投影しているに過ぎないですよ。批評をする、対象を読むという時に、自分が持っている考えをこの作品が代弁してくれているはずだという思い込みや誘惑というのは、どうしても出てくるものだと思います。なので、自分の読みたいものを無理やり対象に見出そうとしないというのは、とにかく批評においての最大の注意点ですね。

Fさん：あくまで批評という立場を崩さずに、その作品ありきで構成するということですよ。

鮎川先生：作品を批評するために、批評理論という方法が近年では確立されてきています。僕の本でも実質批評理論を使っている。ただ批評理論は、これまでの哲学とかジェンダー研究など他のジャンルでなされてきた議論の中で批評に使いやすいものをパッケージしたものを批評理論と呼んでしまっているところがあるんですよ。僕の本にも哲学の話が出てきますが、実際には、哲学のうち批評に流用できる部分の参照なんだけれども。Fさんが、批評理論として確立されたものを勉強したとしたら、同じことをできるようになるかもしれない。ただそれを準備するには卒業論文に間に合うかどうか分からない。また、一定の

道具を全部勉強しておかなければ批評ができないというわけでもないので、対象にふさわしい知識を F さんが持っていれば、それをそのまま使って大丈夫だと思います。例えば「あいのうた」ならば、AI が台頭している時代にそれでも自分が創るということはどういうことなのか、という作家の葛藤がほとんどメインだと思います。なので、批評の手法というよりも、創造性と AI について他の人がどんな風に言っているか、学問的にどんな研究がなされているか、などを横目で見ても最終的な卒業論文のときに参照しながら語るといいかもしれないですね。

F さんはこの曲を改めてどう思いますか。

F さん：第一印象に関しては、MV に書いてある全文を書き出してみて、とにかくすごい！ほかの曲にはない、作者の意思というか熱意というか……そんなことが明確に表れている感じがしました。他の曲とは違うことを言っているかなと思っています。

鮎川先生：この曲が一般のボカロ曲ともどう違うかというと、歌われないメッセージの部分が多いですね。平均的な「曲に文字をどれだけ込めるか」の常識的な量があるとしたら、歌でそれを消化しきれないので、テキストでも作者のメッセージが表現されている。僕の批評ではよく作者と作品を切り離すと言っているけれども、作品に準拠しながら見ていったときに、どう考えても作者のストレートな思いというものがそこに込められているということになったなら、作者について言及するのは必ずしも禁止ではないと思います。強い思いがあふれ出て歌詞の言葉の分量があふれ出て、画面のテキストにこれだけ込められていると言っておかしくないレベルでたくさん入っていますね。

F さん：歌詞と同じくらい、多いですね。他の MV にテキストがついているものとアニメーションですぐ消えたり出たりしますが、この曲はテキストそれぞれがなんとなく見える秒数で移り変わってきますね。

鮎川先生：それは、すごくいい指摘だと思いますよ。

読めるわけない分量の文字の挿入というのがありますよね。例えば、柊マグネタイトさんの「マーシャル・マキシマイザー」³とか。かっこよくてスタイリッシュだけれど、ある意味、読ませようとはしていない。ぬゆりさんの「命ばかり」⁴なども普通にいったら読めない挿入の仕方をしていますね。挑発的に読めない量の文字を提示するのではなく、読ませようとしてこれだけ文字が表示されていること自体が、「あいのうた」の固有性だといえるかもしれないですね。



柊マグネタイト（2021）「マーシャル・マキシマイザー」

<https://www.nicovideo.jp/watch/sm3921>



ぬゆり（2017）「命ばかり」

<https://www.nicovideo.jp/watch/sm31680050>

Fさん：道が開けた気がします。

鮎川先生：さらに、文字の言葉は、詩的というよりも、正直な独白のような度合いが強いですよね。歌詞の方は歌に乗るように音の数を合わせたり、韻を踏んだり、歌詞として設計されているけれども、そういった縛りなしで言いたい本音はこれなんだ、と漏れ出ている感じ。歌詞の言葉の質と画面で表示されるテキストの質の違いにも注目するといいかもしれないですね。

Fさん：はい、ありがとうございます。

鮎川先生：逆にこの曲を一旦棚に上げておいて、AI って F さんはどう思いますか？

Fさん：自分はすぐ思い浮かぶのは ChatGPT なのですが、プロジェクトのアイデア出しに便利だと思います。一方でニュースに出てくるディープフェイクなどは実感がないですが、怖く感じますね。

鮎川先生：ちなみに学校で AI を利用する際の指針は何か言われていますか。

F さん：先生によっては課題に ChatGPT は使わないでと明言する人もいますが、学校の方針としては何も言われていません。

鮎川先生：F さんは学校で教育を受ける当事者だけれど、逆に先生側だったらどうだろうと想像してみると面白いかもしれないですね。答えのあるタイプの課題を出したら AI に突っ込めば回答が出てきてしまう。今の ChatGPT は賢いから、簡潔な解答だけではなく、学生が苦心しながら回答にたどり着いたような冗長さを含めて書き出してくださいと伝えたらやってくれてしまう。そういった状況の中で、ちゃんと教えるとか教育するってどうやった方がいいか。そうやって出てくるものをどう評価したらいいか、結構大変な問題になる。AI がそのレベルで用をなすようになってまだ 2 年くらいなので、この問題への完全解答はまだない状態だと思うんですね。課題によってどれくらい使っていいかという判断を変えている。僕が今いる稲見・門内研究室では、基本工学部で理系の人の方が多い研究室だから、ちゃんと ChatGPT を使ってきてくださいと言われます。突っ込みどころはないか、間違っているところはないか、“てにをは”の違いも含めて、構成を正確にする作業とか。あなたの実力に加えて、ChatGPT を使ってちゃんと精度を上げた状態で持ってきてね、くらいのことを言われることさえある。僕はやっぱり博士課程だから、0 からアイデアのないところから考えてください、というのは AI をお願いしないわけですよ。自分でやりたいことはすでに持っている。そういう状態であれば、プランを ChatGPT と対話して精度を上げていく程度のことになるから、オリジナリティは本人が持っている上での使い方だから、(大学の) 先生も AI をちゃんと使って来なさいという言い方ができるのだとも思います。中学校や高校でやる一定の答えがあるタイプの課題とはちょっと質が違うから、そういう使い方ができている。一方で創作と AI というのはその点でなかなか難しい。どっちのパターンもありうるわけですよ。自分の言いたいメッセージはこうだから歌詞の形で書き直してくださいといったらできてしまう。仮にそれで作ったとしたときに、自分で作った感じがしないとか、ずるをしているように本人が感じてしまう。過渡期だからそういうところで葛藤している人はいると思うんですね。実は大漠波新さんの曲は明確に AI がテーマだけれど、他のボカロ P もそういうことをテーマにしている曲があります。椎乃味醂さんの「あなたにはなれない」⁵とか。

F さん：それは聞いたことがないです。

鮎川先生：まさに創るとはどういうことかを椎乃味醂さんなりに葛藤している曲です。歌詞に「月

曜日の夕暮れ、海岸でコーヒーを飲む魔法使いのアルパカは、雪の結晶でピアノの曲を奏でた。雨の中で眠る紫色のヘリウム風船は、透明な猫の歌声に導かれて、木曜日にカレーを食べる夢を見た。」とあります。イメージ豊かで詩的な想像力をかきたてるフレーズだけれども、すぐそのあとに種明かししている。「これは GPT-4 で生成された、なんら意味性をもたない文章ですが」。曲の中でも、ポエトリーリーディングみたいになっている箇所なのですが、AI に作らせた文章を登場させています。AI が書いた文章と言わなかったら、恐らく聞き手は詩情や比喻性を勝手に見出して意味を受け取るということを多分やったでしょう？と問いかけていると思うんですね。あくまで味酩さんの出したひとつの結論に過ぎないけど、それこそが人間らしさの根幹なのだと言っている。よく考え詰めているからこそできたアプローチだとは思いますが、この時代に創作をするとなったら、こういう問題は、ある意味全員が問われることだと思うんですね。皆 AI を使えるのだから。あと音楽生成 AI もありますよね。トラック自体を作れてしまうし、歌詞は ChatGPT で作れてしまう。AI は賢いから、自分で汗水たらして作った曲よりもぱっと聴いて感じの良い曲さえ作ってしまう。それでも創るとはどういうことか、そう普遍的に問われているかもしれない。こういう AI 論をもう少し学術的な形で書いている論を「あいのうた」¹の分析の外部参照先として使えるかもしれませぬ。ちなみに石黒先生は今の話はいかがでしたか。

石黒先生：とても面白いなと思いながら伺っていました。最初「あいのうた」のタイトルをぱっと見たときにすごくロマンチックな歌なんだろうなと思っていました。全然違ってびっくりしたんですよ。「あい」が AI のことを言っているという話で、創造性の話もすごく面白いと個人的に思っていたのですが、これは AI だけではなく、私の「I」も曲中に書かれていますか。

F さん：私の「I」も歌詞に書かれています。歌詞の中で 3 回「あい」を繰り返すところがあります。1 つ目の「あい」がラブの「愛」で 2 つ目の「あい」が自分の「I」で 3 つ目が AI の「あい」になっています。これもよく考えたら何か出てきそうな組み合わせですね。

鮎川先生：まさにそのとおりだと思います。AI についてなぜ葛藤するかというと、私である必要をなくしてしまうものだからだと思います。その意味で、「私」の問題にも拘泥している曲ですよ。自分が主役になるべきなのに自分が本物か偽物かわからなくなる。自分が自分である手応えや実感のありか、不在のようなことも言っている。「魂」とかも出てくるし。身体的な私、実存みたいなものから歌詞がスタートしていますよね。酸素は吸って吐

かないと人は生きていけないけれど、そうやって生きている自分のハートが確かにある。そこにいる自分から始まりますよね。石黒先生のご指摘はまさにその通りだと思います。Fさんはここから創作していくわけですが、AIをどれくらい使うことになるでしょうね。

Fさん：できるだけ自分の考えをそのまま載せたいです。拙いかもしれないけれど、自分の実力だし、というマインドで自分で創ったうえで、AIで修正できるならちょっと修正するかもしれないですね。

鮎川先生：AIが創れるなら自分がやる意味ないじゃん、という感覚はわかるし、そう思った上で、それでも創りたいと思った人が、創っていく人になるのかなという気もしています。AIができるからいいじゃんで終わる人は、これからは創り手になっていこうと思わないかもしれないですね。Fさんも、ChatGPTでも鮎川ばてに頼るでもなく、自分で創ることが大事です。大漠波新さんも、創作物の中でAI使っていないとは言っていないんですよ。どこかはAI生成も使っているんじゃないっけ？

Fさん：MV中のテキストの背景は、(イラスト担当の) Oda Kogane さんが書いたのではなくてAIで生成したものと絵柄から考えています。

鮎川先生：なるほど。映像の方はまさに人じゃなくてAIを活用して表現しながら、並行してAIに向けての葛藤をテキストで表現している。すごくコントラストティブですよ。いい意味でそれをちゃんと指摘してあげるだけでも、結構この作品の固有性の指摘になるかもしれないですね。

構成は見えてきましたか？卒業論文はまだ考える時間があるとして、中間発表は5分なわけだけれど、5分ということは曲をかけていたら終わってしまうから、曲をかけずに説明しますか？

Fさん：もしかけないと説明できない、是非聴いてほしいというところがあったら、30秒以下で流したいです。

鮎川先生：音楽表現ですからね。実際の作品を聞くと伝わりやすいですよ。

石黒先生：私のように、初めてこの曲やボーカロイド曲を聴く人もいるかもしれないので、その人たちがどんな反応をするのか聞いてみるのも、とても勉強になりそうな気がすると思います。

鮎川先生：初めてそういう曲に接する人も多いでしょうね。さっき言った、画面内で歌詞も表示するし読み上げられないテキストも表示するという映像表現は、他のジャンルではそれほど一般的でないと思います。そこだけで新鮮に思う人もいる気がしますね。ポカロカルチャーも、初音ミク発売から18年を迎えます。その長い歴史の中でいろんな新しいものを発明してきましたが、映像における文字表現の進化はその代表的なものだと思います。逆にJ-POPを見ると、歌詞表示は画面下にちょっと入っているだけ。文字をいかに見せるかみたいなところにすごく個性があるジャンルだから、映像のパッセージを見せることで、新鮮に思ってもらえるかもしれないですね。

Fさん：文字の見せ方で言うと、文字MVみたいなものがあるくらいですね。

鮎川先生：そうそう、もう結構メジャーになってきていますよね。若い世代にはメジャーだけど、改めて音楽全体の中で見ると、独自発展しているカルチャーだと思います。

最後に言えることとしては、5分は短いので、ここまで考えたことをどこに要素を絞って、そこだけ言うかみたいな作業になっていくかなという気はします。

Fさん：ありがとうございます。これからの方針としては、伺ったことをもとに再度「あいのうた」を研究してから、取捨選択していく感じで進めていきたいと思っています。

■支援ミーティングを終えて

Fさん：1つの講義を受けているような感覚で、講義を聞いて相談もしているみたいな感じでした。この時間を設けていただいてよかったと思いました。中間発表のテーマも明確になったし、ここで気づいたこともたくさんあったので、発表に生かしていきたいです。

鮎川先生：Fさんにそう言ってもらえて嬉しいです。教員の立場から教えるというのも選択肢としてあったかもしれないですが、僕の議論を押し付けることになってはいけないとブレーキを掛けつつ、一緒に考えようと臨みました。もう作品を十分に受け取っていると思うので、あとはそれを「まとめる」というプロセスを丁寧にやればバッチリだと思いました。

本記事で参照した書籍

鮎川ぱて. (2022). 東京大学 「ボーカロイド音楽論」 講義. 文藝春秋

本記事で参照した動画一覧

1. 大漠波新 (2023) 「あいのうた」 (2025 年 8 月 21 日閲覧)
<https://www.nicovideo.jp/watch/sm42445494>
2. 大漠波新 (2023) 「のだ」 (2025 年 8 月 21 日閲覧)
<https://www.nicovideo.jp/watch/sm42983761>
3. 柊マグネタイト (2021) 「マーシャル・マキシマイザー」 (2025 年 8 月 21 日閲覧)
<https://www.nicovideo.jp/watch/sm39217773>
4. むゆり (2017) 「命ばかり」 (2025 年 8 月 21 日閲覧)
<https://www.nicovideo.jp/watch/sm31680050>
5. 椎乃味醂 (2023) 「あなたにはなれない」 (2025 年 8 月 21 日閲覧)
<https://www.nicovideo.jp/watch/sm41955561>